

看護師を目指す留学生のための ライティング教材の使用感

Advantages and disadvantages of learning materials for writing for international nursing students

山元 一晃¹⁾

Kazuaki YAMAMOTO

浅川 翔子²⁾

Shoko ASAKAWA

加藤 林太郎³⁾

Rintaro KATO

要 旨

筆者らが作成した看護留学生向けのライティング教材について、実際に使用した学生にインタビューを実施し、その難易度、使いやすさ、有用性などについて検証を行った。その結果、一定程度留学生が役に立ったと感じていることが分かった。「患者情報の記録」「先生とのメール」は有用性が高かったと感じている一方で、「私の理想の看護師」「施設情報」については、既習だったこと、特に難しくなかったことから、役立ったとは感じていなかったようである。また、「看護展開」などは、実際の実習などで課されたものよりも易しく、難易度を上げてもよいのではないかという指摘があった。さらに、領域別を書くことや、実際の患者は合併症を抱えていることなどの相違点があったようである。テキストで扱われていなかった内容として、変更が生じた場合の修正の仕方、指導者への説明やカンファレンスなど口頭でのやりとり、専門用語などについても含めて欲しいとの要望があった。自習で使えるかについては、意見が分かれ、解説があるため自習も可能という指摘があった一方で、最初は自力ではできなかったなどの指摘もあった。

キーワード：看護留学生 実習記録 看護記録 教材開発 ライティング

¹⁾ 金城学院大学文学部

²⁾ 慶應義塾大学看護医療学部

³⁾ 神田外語大学留学生別科

1. はじめに

英語圏においては、特定目的のための英語教育の文脈において、看護師をめざす留学生（以下「看護留学生」とする）のための知見が多く蓄積されている（Bosher 2014）が、日本においては、看護留学生のための日本語教育の知見が十分にあるとは言いがたい。また筆者らは看護留学生に対する日本語教育にあたる中で、ライティング、特に実習や演習に際して求められる記録の記入に看護留学生自身が困難を抱えていることを感じていた。就職後、看護師が果たすべきタスクに「書くこと」が含まれており（Hussin 2002）、記録として残ることを考えれば、ライティングは卒業までの間に身に付けるべきことである。

そこで、筆者らは、看護師学校養成所の演習や実習において求められる実習記録など看護特有の様式に適切に記入できることを目指した教材を作成してきた。適宜改良を重ね、2018年から約3年間にわたって留学生向けの日本語の授業で使用を続けている。ただ、これまで、教材の妥当性や有用性についての調査は行っていなかった。そこで、難易度、使いやすさ、有用性など教材の妥当性に関するインタビューを、当該教材を使用した看護留学生に対して行った。

2. 教材

教材の具体的な内容については、山元・浅川・加藤（2021）で、具体的な開発過程については、加藤・山元・浅川（2019）で詳しく述べているので、ここでは簡単に紹介する。

教材は、「実習を含む大学等での学びに即していること」と「専門分野における非母語話者を対象とした日本語教育に有用であること」を考慮し作成した（山元・浅川・加藤 2021）。表1に示したように、各課で学習することは、それぞれ看護教育における課題（レポート・記録物）に対応している。ほとんどの課は、情報源が提示されている。たとえば、第2章第1課や第3課では、電子カルテが情報源となっている。これは、看護師である浅川が架空の患者を想定し作成したものである。各課は、不適切な箇所を見つける「間違い探し」、それについての「解説」「コラム」「練習問題」「模範解答」からなる。想定している日本語レベルは、上級以上としており、常用漢字外の漢字のみ振り仮名を振った。

この教材を、2018年度後期、2019年度後期、2020年度後期に当時1年生だった学生に対して使用した。なお、2018年度は加藤が、2019年度および2020年度は山元が担当している。2020年度後期については、新型コロナウイルス

表1 テキストの構成と対象となる課題・情報源（山元・浅川・加藤 2021）

	課のタイトル	看護教育において対応する課題	情報源
【第1章】実習前	・第1課 私の理想の看護師	入学初期のレポート	なし
	・第2課 施設情報	施設情報シート	施設のホームページ
	・第3課 行動計画	行動計画シート前半	友だちとの会話
【第2章】実習中	・第1課 患者情報の記録	患者情報整理シート	電子カルテ
	・第2課 1日の振り返り	行動計画シート後半	友だちとの会話
	・第3課 看護展開	アセスメントシート	電子カルテ・患者へのインタビュー
	・第4課 看護計画	看護展開シート	アセスメントシート
	・第5課 先生とのメール	なし	なし
【第3章】実習後	・第1課 まとめレポート	実習後に提出するレポート	これまでの成果物

ス感染症 (Covid-19) の影響により、変則的な開講となり、教材の使用方法にも影響が大きかったため、本稿では対象としていない。

授業は、毎週1回 (90分)、15週に渡って実施された。受講者は、改善すべき点を含む各様式への記入例を見て、どこに問題があるか、どのように改善できるかを考える。その後、授業担当者が、いくつかのポイントに分けて、当該の様式に記入する際の注意点を説明する。さらに、いくつかの練習問題を解いて理解したところで、表1の情報源を参照しながら、白紙の様式に記入していく。

看護教育において求められる実習の言語的特徴の分析 (山元・浅川 2021 など) や、看護教員に対するインタビュー (加藤・浅川・山元 2021 など) により得られた知見を、随時取り込みながら改良を加えていった。

3. 方法

国内の大学の看護学部 to 所属する留学生5名 (インタビュー実施当時4年生2名、3年生3名) に対して教材についてのインタビューを行った。協力者は、所属大学の1年生後期にこの教材を教科書とした授業を履修している。インタビュー実施当時 (2021年8月～9月) の協力者の詳細については、表2に示した。

インタビューに先立ち、内容の難しさや有用性などに関する事前アンケートに回答してもらった。その回答に基づきインタビューを実施した。インタビューは、ビデオ会議シ

ステムを使用し、遠隔で40分程度行った。原則としてアンケートの回答に沿って進め、回答がより具体的になるような質問をした。

インタビューは文字化したのち、筆者ら (日本語教師、看護師) が質問ごとに、その回答の要点を箇条書きにした。

4. 結果

インタビューは、アンケートに沿って行った。その内容は、「教材の日本語の難しさ」「各課の有用性」「各課の項目ごとの有用性」「実際に使われる日本語との違い」「全体的な使いやすさ」「自習での使用可能性」に関することに大きく分けられる。本節では、アンケート結果を示した上で、筆者らがまとめた、インタビューでの留学生の語りの要点を引用しながら示す。

4.1 「教材の日本語の難しさ」

教材の日本語の難しさについては、事前アンケートにおいて、「1. 簡単だった」～「5. 難しかった」の5件法で回答してもらった。その結果、4名が3と回答し、いずれも、当初は難しいと感じたが、徐々に慣れてきたと答えた。インタビューにおいては、以下のような語りが見られた。

Aは、「最初はイメージできず難しく感じた」(A) と述べている。「実際に実習を通して、記録のイメージが付き、勉強している内容は振り返ってみると難しくないと思った」(A) や「授業で練習できたから実習をスムー

表2 インタビュー対象者の詳細

学生	学年	入学年度	教材使用時期	母語
A	1年生	2018年度	1年生後期	中国語
B	1年生	2018年度	1年生後期	ベトナム語
C	2年生	2019年度	1年生後期	中国語
D	2年生	2019年度	1年生後期	中国語
E	2年生	2019年度	1年生後期	中国語

ズにできた。実際の実習に似ていた」(B)と述べられており、実習に活かすことができたことが分かる。

一方でDは「もう少し難しいことを扱ってもいいのでは。授業が楽になると思う」(D)と述べており、実習とのギャップについて述べていた。また、Eも「役に立つ内容もあった」(E)ものの「自分にとってはちょっと簡単すぎた」(E)と述べていた。

Dは、「難しかったところもあったり、そうでないところもあった」(D)と述べ、具体的には、「理想の看護師像」と「メール」が簡単だったと述べていた。

4.2 「役に立った課」

どの課が役に立ったかについては、事前アンケートにおいて、複数回答可で選択してもらった。「行動計画」(計画の記載方法)「先生とのメール」(メールの書き方)は5名が役に立ったと回答した。

「行動計画」については、「練習と実際が同じだった」(A)などの指摘があった。Eが「行動計画・看護展開は、学んだことを思い出しながら実際のものにも取り組めた」(E)と述べているように、教材で学習したことを活かしている様子であった。ただ、「足りないところはインターネットで調べた」(E)とも述べており、自分で補う必要があったようである。また、「先生とのメール」については、「今でも役に立っている」(D)との指摘があった。インタビューが看護の授業で扱われたことがあるかを質問したところ「ないですね」(D)とDが回答しているように、大学で取り立ててメールの書き方についての指導はないようである。

また、「患者情報の記録」については、4名が役に立ったと指摘していた。各課について聞く中で、「記録すべき要点と、それをど

のように書いたらいいかが理解できた。」(A)、「練習と実際が同じ」(D)といった指摘があった。

「看護展開」「看護計画」については3名が役に立ったと指摘していた。

一方、「施設情報」(収集した情報の記載方法)は1名のみ役に立ったと回答し、「私の理想の看護師」(レポート)については役に立ったと回答した人はいなかった。前者については、施設から情報提供があるなど、実際にはそれほど難しくなかったようである。また、両者について、「1年生の前期に既に済んでいる内容を後期にやった」(D)のように既習の内容であるとの指摘があった。

4.3 「役に立った各課内の項目」

各課内のどの項目が役に立ったかについては、複数回答可で選択してもらった。「練習問題」「模範解答」については4名の学生が役に立ったと回答した。「練習問題」については「練習があったから実習でスムーズにできた」(B)、「基礎が身についたので迷わず授業に参加できた」(D)などの指摘があった。また、「練習問題をすると安心に繋がる」(E)という指摘もあり、実習などでの不安の解消にも繋がっているようであった。

「模範解答」については、「アセスメントやレポートの書き方の参考になった」(A)、「解答を参考にして理解していたのかもしれない」(D)と述べられており、実際に書くときに参考にしたようである。

一方、「解説」「間違い探し」については2名のみ、「コラム」については1名のみが役に立ったと回答した。「解説」については、「もう少し詳しい方がいい」(E)との指摘もあった。一方、Dが「看護の授業でやる前にSOAPを日本語の授業でやったから予習となった」(D)と述べているように、事前に

説明されたことで、専門の授業でも理解しやすかったとのことだった。

4.4 各課の「説明の分かりやすさ」「練習の使いやすさ」「実際の活動との違い」

各課それぞれの分かりやすさ、使いやすさ、実際の活動との違いについては、事前アンケートにおいて、それぞれ、「1. 分かりやすかった」～「5. 難しかった」、「1. 使いやすかった」～「5. 使いにくかった」、「1. 同じだった」～「5. 違った」の5件法で尋ねた。各課それぞれについて、アンケートへの回答とインタビューの回答内容を以下に示す。

4.4.1 私の理想の看護師

「私の理想の看護師」の解説の分かりやすさについては3名が1（「分かりやすかった」）と回答し、2名が3と回答した。

また、練習の使いやすさについては、3名が1（「使いやすかった」）と回答し、2名が3と回答した。

実際の活動との違いについては、1名が1（「同じだった」）、1名が2、3名が3と回答した。

インタビューでは、5名のうち2名が内容を覚えていないと回答している。実際に分かりやすかったと答えたのは、AとEのみであった。ただ、Aも「実際にはあまり活用していない」（A）、「面接の時には役立ったが実習ではあまり役立たなかった」（A）と述べており、汎用性は高くなかったことが分かる。Aが「作文かレポートはどういう形で書こうとか、役に立ってて勉強になる」（A）と述べているように、一般的なレポートの書き方を学ぶ上では役立ったようである。Eは「中国と日本では、看護師として求められるイメージが違う気がする」（E）と述べており、文化の違いに目をむける切っ掛けになったよ

うである。

4.4.2 施設情報

「施設情報」の解説の分かりやすさについては、3名が1（「分かりやすかった」）、1名が2、1名が3と回答した。

また、練習の使いやすさについては、3名が1（「使いやすかった」）、1名が2、1名が3と回答した。

実際の活動との違いについては、2名が1（「同じだった」）、1名が2、2名が3と回答した。

「使いやすかった」と回答したBは「実際もホームページから情報をとったから、練習が役に立った、使いやすかった」（B）と述べており、実際とテキストとが似ていたことを指摘していた。特に「質問の表現が少し違うが、取る必要がある情報など概ね同じ」（B）と述べており、実習などで記入を求められる内容と同じであったとのことである。

一方で、Dは「ホームページからコピーしているのでそこまでやらなくても良かった」（D）と述べており、特別難しさを感じていない様子がみられた。また、「施設の情報より、関連した実習中の記録の課題『この施設と地域との関連、どんなところで役立っているか』の方が難しかった」（D）とのことであった。

さらにAは、「カンファレンスで話し合う際に施設の情報を知っておく必要はあるが、記録の課題はなかった。」（A）と述べ、実際には自分で考えて書く必要がないため、特別役に立ったわけではないようである。

先述したAの語りにみられるように「施設情報シート」に相当するものがないという認識を持っていたり、Dのように、実際にはそのまま書き写すだけだったという認識を持っている留学生もいるようである。

4.4.3 行動計画

「行動計画」の解説の分かりやすさについては、3名が1（「分かりやすかった」）、1名が2、1名が3と回答した。

使いやすさについては、3名が1（「使いやすかった」）、1名が2、1名が3と回答した。

実際の活動との違いについては、3名が1（「同じだった」）、1名が2、1名が3と回答した。

「実習中の毎日の課題なので、一つの模範解答（例）があると4年間ずっと使える」（A）というような内容が語られていた。また、「授業で教えてもらうことはないから役に立った」（A）と述べていた。またEは「今でも学んだ内容を思い出して書くことがある」（E）と述べており、3年生であるインタビュー当時でも参照することがあるとのことだった。一方で「実際には実習前に看護学部から配布された手引きを見て書くことが多かった」（C）が、日本語の教材と看護学部の教材の両方を参考にできたというメリットもあったようである。

しかし、「1年生の時の実習と以降の実習で基本的なことは一緒だったが3年生以降は科目によって記録が異なる」（B）、「実習の現場で臨機応変に修正しなくてはならなかった。さらに口頭で説明しなくてはならない」（D）など、実習ではより高度なことを求められるようだった。Dは、これについて、「口頭で指導者と対話する練習がしたい」（D）と述べており、その理由として、その場で修正することが難しく、修正に時間がかかると怒られたり、指導者に行動計画を伝える必要があったりするため、口頭で説明するスキルが必要であることを挙げていた。

4.4.4 患者情報の記録

「患者情報の記録」の解説の分かりやすさについては、4名が1（「分かりやすかった」）、1名が3と回答した。

また、練習の使いやすさについては、4名が1（「使いやすかった」）、1名が3と回答した。

実際の活動との違いについては、3名が1（「同じだった」）、2名が2と回答した。

Aは「記録すべき要点とどのように書いたほうがいいかが理解できた」（A）、Bは「SOAPの学習において患者の情報をカルテから抜き出す作業で役に立った」（B）と述べており、患者の情報を抜き出し、再構成して書くことを学べたことがよかったと感じているようである。Eは「大学の授業でも学んだ内容を活用できている」（E）と述べており、3年生になった現在も参照しているようである。一方でCは「ただ写すだけで簡単」（C）と作業自体に難しさを感じていなかったようである。

Bは、「科目によって内容・特徴が異なるため、フォーマットが練習と異なった」（B）とも述べており、実習においては科目間によって大きく異なるようである。

4.4.5 1日の振り返り

「1日の振り返り」の解説の分かりやすさについては、3名が1（「分かりやすかった」）、1名が2、1名が3と回答した。

また、練習の使いやすさについては、3名が1（「使いやすかった」）、1名が2、1名が2と回答した。

実際の活動との違いについては、3名が3（「同じだった」）、2名が2と回答した。

Aは「書き方やまとめ方について学べるため役立つと思う」（A）、Bは「難しかったが、先生が直してくれたので分かるようになった」（B）と述べていた。

また、Bが「実習する領域によって振り返り内容が違うが書き方は似ている」(B)と述べているように、書き方は似ているとのことだった。ただ、「実習の実際では「振り返り」で必要な分量が練習よりは多くなかった」(A)や、「実際にはもっと簡単な日本語で書いた」(B)と述べるなど、実習では、より簡素に書いていたようであった。

4.4.6 看護展開

「看護展開」の解説の分かりやすさについては、3名が1（「分かりやすかった」）、2名が3と回答した。

練習の使いやすさについては、3名が1（「使いやすかった」）、1名が3、1名が4と回答した。

実際の活動との違いについては、3名が1（「同じだった」）、2名が3と回答した。

Aは「(SOAPの)SとOの情報収集方法がわかりやすかった」(A)、Bは「2年生の時に役に立った」(B)と述べていた。Bは「書き方を直してくれたのが役に立った」(B)とのことで、テキストそのものよりも、授業実施者の添削が役にたったと述べていた。

一方で、「実際の病院での事例展開の場面で、日本語の授業で学んだものの方が簡単だったと感じた」(D)や「実際の事例では、もっと複雑なものを書かなければならない」(E)というように述べられており、実習の方がより複雑で難しいということが分かる。より具体的には、「日本語の授業の患者例は1つの病気の事例なので、実際の患者は複数の病気を持っている点が異なった」(D)、「実際は血液データなどの情報が重視されるが、教材では患者の話などが多い」(E)という。また、「実際は各領域を分けて書く必要があったが、日本語の授業では一つだけ」(C)と述べられている。これについてAは、「(SOAP

の)Aのところを看護の専門用語や専門知識の部分を充実させて欲しい」(A)、「実際は13領域にわけて展開していたので、同じように練習したい」(A)といった具体的な要望を述べていた。

4.4.7 看護計画

「看護計画」の解説の分かりやすさについては、3名が1（「分かりやすかった」）、2名が3と回答した。

また、練習の使いやすさについては、3名が1（「使いやすかった」）、1名が3、1名が4と回答した。

実際の活動との違いについては、3名が1（「同じだった」）、1名が2、1名が3と回答した。

これについて「看護の授業と同様の内容だったため授業の参加において役立った」(A)と回答しているものの、個別的には、実習とは異なる点があったようである。Dは具体的に、「患者の合併症が複数あるため、計画を複数立てる点で異なる」(D)ことや、「その日の患者さんの状態によって臨機応変に内容を変えないといけない」(D)ことを挙げており、特に後者については、その場で修正する練習があった方がよいかというインタビューの質問に対して「はい」と答えた上で、具体的な例として、立てた計画を中止しなくてはいけない場合の修正方法を挙げていた。またEは、教材ではヒントを踏まえて書くが、「実際は、自分で考えて、ヒントのない中で書かなければならない」(E)と述べていた。

4.4.8 先生とのメール

「先生とのメール」の解説の分かりやすさについては、5名全員が1（「分かりやすかった」）と回答した。

また、練習の使いやすさについては、5名が1（「使いやすかった」）と回答した。

実際の活動との違いについては、5名が1（「同じだった」）と回答した。

「お作法、ルールを理解できた」(A)、「敬語や適切な言葉がわからなかったため入学当初はメールが難しかった」(B)が、「授業を受けて理解した」(B)というように、適切な表現やマナーなどが学べてよかったとのことだった。また、Aは「中国ではメールの文化がない。日本人の方は慣れていていると感じる」(A)と述べ、文化の違いを指摘していた。一方で、Cは「実習ではメールをする機会はなかったが、そのほかの機会では役に立った」(C)と述べており、実習にはあまり関連していないことも述べられていた。「今でも役に立っている」(B)や「今でも参考にしている」(D)など、4年生や3年生になった現在も参考にすることがあるとのことだった。

4.4.9 まとめのレポート

「まとめのレポート」については、年度によって、使用状況が異なるため、アンケートおよびインタビューには含めなかった。

4.5 「実際に使われる日本語との違い」

各課についてインタビューを行った後、実際の日本語との相違についてもたずねた。その結果、全員が「変わらない」または「大きな違いはない」と回答した。ただ、Aからは「使われている日本語ではなく（記録に）用いている内容が違う」(A)ため、「日本語の授業でももう少し用語や知識など看護の専門性を取り入れてほしい」(A)との要望があった。専門用語については、インタビューの最後にDも語っていた。

4.6 「自習での使用可能性」

自習でも使えるかについては、A、Dは「自習でも使えると思う」と述べており、その根拠として、「専門書と一緒に使いながらであれば、書き方の解説と見本があるから自分でもできると思うが、『アセスメント』においては看護の専門知識も必要であるため難しいと思う」(A)こと、自身が「看護展開の授業で日本語のテキストを参考にしていた」(D)ことが挙げられた。

一方で、「自習にも使えるが難しい」(C)や、「自習で使うにはぜんぜん足りない」(E)という意見もあった。その根拠として、「微妙な違いは先生から指摘されないと分からない」(C)こと、「レベルが基礎的なものにとどまっている」(E)ため「深いレベルまで理解するには、授業内で扱われた方がいい」(E)ことが挙げられていた。また「ここまで主導的に勉強できる学生はいない」(E)という指摘もあった。

Bは「初回は自力ではあまりできなかった」(B)ようで、「教科書はわかりやすいが先生がいた方がよりよい」(B)と述べていた。その根拠として、「直接教えてもらった方が時間がかからずアドバイスももらえる」(B)ことや、「その場で添削してもらえると、その場で頭に入る」(B)ことを挙げていた。

4.7 その他

インタビューの最後に補足することはないかを聞いた。Aは、「助詞の授業が役立った」(A)と述べており、その根拠として、「間違えやすい」(A)からということを挙げていた。また、「看護の授業では書き方について説明してくれない」(A)こと、「授業に加えて自分で調べること、今回の日本語の授業を参考にすること、それらを通して実習において役立った」(A)ことを述べていた。

Bは、「実習は終了したが、これまで培った基礎があるおかげでスムーズにできている」(B)と述べており、基礎的な知識を得るのに役立ったことを述べていた。

Cは、「はじめは難しいと思ったが、実際の実習はもっと難しかったので、やってよかった」(C)と述べていた。

Dは、「看護師同士は専門用語、カンファレンスで練習がしたい」(D)と述べており、その根拠として、「患者さんに対してわかりやすい言葉で説明するが、カンファレンスでは看護師同士が医療用語を使わないといけない」(D)ことを挙げていた。また、「学生カンファレンスの司会を交代でしないとけないから練習をしたかった」(D)とも述べており、語彙の使い分けや司会が特に難しかったようである。

Eは、「1年生のうちに、もう少し難しいところまで勉強しておいた方がいい」(E)と述べていた。具体的には、「看護的な思考を学んでおいた方がいい」(E)とのことで、テキストでは深く取り上げなかった看護的な思考についての言及があった。

5. まとめと今後の課題

レベル、使いやすさの観点から、一定の評価を得たと考えられる。「行動計画」「先生とのメール」については5名が役に立ったと回答した。また、「患者情報の記録」は4名が役に立ったと回答した。「行動計画」や「患者情報の記録」など「先生とのメール」以外については、「事前に学習しておくことで、授業や実習でスムーズにできた」「実習で思い出した」などの指摘があった。日本語の授業で事前に学習しておくことで、専門の学習においても難なく取り組めるようになったということが分かる。

その一方で、課題によっては、実際の方が

難しく感じたようであった。特に「看護展開」は、実際には、各領域に分けて書く必要があったり、教材で扱われていた患者例は1つの病気の事例であったが、実際には合併症を持つ患者だったりして、その違いに戸惑ったようである。看護展開は、既に多くの教材が出版されているため(任2015など)、その橋渡しとなるような構成にすることも考えられる。

必要性を感じられなかった留学生が多かった項目もあった。具体的には「理想の看護師像」で、教材を使用する時点においては既習だったり、実習とはあまり関連がなかったりしたようである。筆者らの意図は、アカデミックライティングの復習であったが、その必要性も含めて検討の余地があるかもしれない。

留学生にとっては、一度取り組んだことがあるということが、役に立ったという認識に繋がっているようである。

専門性を高めて欲しいという意見もあったことから、カンファレンス、患者や指導者との会話、専門用語など、ライティング以外の内容についても検討していく必要がある。具体的には、以下のような方法が考えられる。看護留学生にとって難しいスキルを、留学生・教員への調査によって明らかにしたBosher(2006)や、看護師が勤務において、誰と関わりどのようなタスクを行うかを明らかにしたEpp & Lewis(2008)などを参考にしながら、知見を蓄積し、教材に反映していく必要がある。

付記

本稿は、専門日本語教育学会第24回研究討論会において発表した内容を含んでいる。また、本研究は、国際医療福祉大学倫理審査委員会および金城学院大学ヒトを対象とする研

究に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP19K00744の助成を受けたものです。

参考文献

- Bosher, S. (2006). ESL meets nursing: Developing an English for nursing course. In M. A. Snow & L. Kamhi-Stein (Eds.), *Developing a New Course for Adult Learners* (pp. 63-98). TESOL.
- Bosher, S. (2014). English for Nursing. In B. Paltridge & S. Starfield (Eds.), *The Handbook of English for Specific Purposes* (pp. 263-281). Wiley-Blackwell.
- Epp, L., & Lewis, C. (2008). Innovation in language proficiency assessment: The Canadian English Language Benchmark Assessment for Nurses (CELBAN). In S. Bosher & M. Dexheimer Pharris (Eds.), *Transforming Nursing Education: The Culturally Inclusive Environment* (pp. 285-310). Springer.
- Hussin, V. (2009). Facilitating success for ESL nursing students in the clinical setting: Models of learning support. In S. Bosher & M. Dexheimer Pharris (Eds.), *Transforming Nursing Education: The Culturally Inclusive Environment* (pp. 363-386). Springer.
- 加藤林太郎・浅川翔子・山元一晃 (2021) 「看護教員へのインタビューからみる看護留学生の学びにおける困難とは：看護留学生向けライティング教材開発を念頭に」『日本国際看護学会誌』4 (2), pp. 23-34.
- 加藤林太郎・山元一晃・浅川翔子 (2019) 「[状況] から出発する日本語教育 実践報告：看護系留学生のためのライティング教材開発—電子カルテ等からの情報収集による課題遂行を中心に—」『早稲田日本語教育学』27, pp. 31-35.
- 任和子 (2015) 『実習記録の書き方がわかる！領域別 看護過程展開ガイド』照林社.
- 山元一晃・浅川翔子 (2021) 「看護実習記録に用いられる語彙の特徴の分析」『社会言語科学』23 (2), pp. 67-80. https://doi.org/10.19024/jajls.23.2_67
- 山元一晃・浅川翔子・加藤林太郎 (2021) 「看護師を目指す留学生のためのライティング教材の開発とその活用」『金城学院大学論集 人文科学編』18(1), pp. 129-139.